

ギリシア・ローマ期の哲学の森に分け入って

——反核・平和・民主主義と学問——

岩 崎 允 胤

本稿は、日本クザリヌス学会第十五回大会（一九九六年十一月三十日、早大）でおこなった特別講演である。本文中の見出しは、当日配布した報告の目次をもとにしている。

過日、クザリヌス学会の会長で早大の小山宙丸先生から、十一月のクザリヌス学会で、特別講演をするようにとのお話しをいただきました。わたくしは、三十年ほど前、ニコラウス・クザリヌス（十五世紀のドイツ生まれの哲学者）の名著『知ある無知』（De docta ignorantia）を大出哲さんと共訳出版（創文社）いたしましたが、その後久しくクザリヌス研究から遠ざかっておりますので、その任ではないとためらう気持ちが大きかったです。最近未来社からあいついで刊行した『ギリシア・ポリス社会の哲学』と『ヘレニズム・ローマ期の哲学』の二書に関連させて何か話さないかとお勧めがありましたので、お引き受けすることにいたしました。

I 生活と思想

——反戦・平和・主権在民と、哲学の研究

最初に、これらの二書、すなわち古代ギリシア・ローマ期の哲学史を主題とする両書でわたくしがどういう点に強調点をおいたかを理解していただくために、ギリシア・ローマ期の哲学とわたくしとの関わりあいについていくらか述べさせていたいただきたいと思ひます。それゆえ、わたくしのこれまでの生活と思想にしばらく関わることから始めるのを、お許しいただきたい。

私のこれまでの生活と結びついて離れないものは、戦争と平和、天皇制と民主主義（主権在民）の問題であります。資本主義批判というもう一つ大きな問題がありますが、多岐に分かれすぎるので、たちいらないことといたします。

一九三一年、小学校四年生のとき満州事変がおこり、まもなく傀儡^{かいらい}国家として満州国が作られました。そのころ教室で「満州は日本にとって生命線だ」と教えられたとき、「それなら、満州の人にとっては、生命線はどこなのか」と思はずにはいられませんでした。そして、三六年二月二十六日の朝、白雪^{はくせつ}の霏々^{ひひ}と降りしきるなか青年将校の決起を告げる新聞の号外を手にして、かれらの行動には同意できないことを母と語り合ったことを記憶しております。こうしたことが、時代に関わるわたくしの思想の原点であり、それは今日まで変わっておりません。

これより先、一九三二年に創立された日本共産党は、主権在民・反戦平和を高く掲げたために、絶対主義的天皇制によって徹底的な弾圧を受け、その非道な弾圧の魔手は、ついに労働者、農民、知識人、芸術家、学生など、国民のあらゆる抑圧された階層にまで及びました。日本の諸大学では瀧川事件、美濃部事件、河合事件

などがあいついでひきおこされ、学問研究の自由は根底から侵害されました。わたくしには、「金甌無欠の国体」など嘘ではないかと思われ、天皇制への疑問、軍国主義や軍部（とくに陸軍）の横暴への拒否がますます募るばかりでした。

旧制高校では、何でこの学校に紛れこんだのかわかりませんが、漢文担当のウルトラ教官の麓教授、かれを除けば（もちろん配属の軍人は論外として）、おおむね緊迫する時流とは何の關係のない講義がつづきました。その頃のことについて二、三の例をいえば、若い村川堅太郎教授からは、その学殖ある講義のほかに、わたくしは個人的にラテン語の手ほどきをしていただきました。先生は早速丸善に電話をかけて英語で書かれたラテン語の入門書（有名なマクミランの書物はその頃もう在庫がありませんでした）をとりよせてくださり、わたくしは、自分で勉強して、練習問題で分からないところを毎週質問するという形式で教えていただきました。その入門書を終えたところで、いきなり注釈付きのタキトゥスの『ゲルマニア』を読むように勧められました。これは、たいへん難しく、その内容が当時のわたくしの関心からかなり遠かったので、長くはつづきませんでした。しかし、もしわたくしが古代ギリシア・ローマ史の専門的な研究にすすんでいたならば、この書物は、生涯忘れることのできない出発点となったことでしょう。東洋史の、やはり若き日の榎一雄教授は、高天原や天孫降臨などまるで何処吹く風で『魏志倭人伝』によって耶馬台国についての講義をすすめられました（いわゆる「皇紀」の年代とこれとをつきあわせれば、前者のでたらめな作為は歴然となります）、西洋史の亀井高孝教授は、ドレフュス事件にさしかかったところで、声を大にして「文部省によって、この事件の講義をしてはならぬと、禁止されている、そういう重要な事件がここであったことをよく記憶しておくように」と説かれました。これは、文部省による思想・言論・学問・教育の自由にたいする不当な抑圧があることを具体的に指摘されたこととして、由々しい問題であるとわたくしには思われました。一九四〇年、旧制高校三年の夏休

みに政変がおこり、橋田邦彦校長は近衛内閣の文相として入閣し、その後任に京城大の著名な哲学者安部能成教授が赴任しました。寮生の講堂おつか校鳴堂で安部校長は就任の演説をし、「自由主義のために、打たれても叩かれてもたかう」と語って寮生から万雷の拍手を浴びました。さまざまな思想の寮生がその座にはいたにせよ、当時なお自由主義は多くの寮生にとって失うことのできない理念でした。

東大では法学部に入学いたしました。民法で社会法学の立場の末弘徹太郎教授、イギリス法の高柳賢三教授、ローマ法の原田慶吉教授も忘れがたいですが、商法の田中耕太郎教授（『世界法の理論』三巻の著者）からは現代法に生きるアリストテレスの正義論や衡平（*equity*）の思想を学びましたが、そればかりでなく、教授は三十六番大教室での講義でしばしば「ミリタリズムへの反対」を言明し、トルストイをたたえ、昭和十七年（一九四二年）に、突如、大学在学年限の短縮と学徒出陣がきまるや、教壇でこのホットなニュースをとりあげ、「学問の粗製濫造に反対する」と述べました。他方、刑法の小野清一郎教授が、應報刑の立場から「刑の本質は御稜威みいつの現成げんじょうである」と講じたのには、わたくしは強い反発を覚えました。横田喜三郎教授は、H・ケルゼンの純粹法学の立場から淡々と国際公法を講じておりましたが、わたくしは、当時、ほとんど死文と化している国際連盟規約を軸に、ひたすら没社会的に、純形式的に純論的に体系を組立てることの無力さを、その理論的な力のなさを、感じないわけにはいられませんでした。

一九四四年から四五、六年にかけて、ロマン・ローランの反戦・平和思想をとおして、片山敏彦氏から大きな恩恵をうけるようになりましたが、このことについては、最近別なところで書きましたので、ここではたちらないことといたします。

* 拙著『思索と詩想の底』邑書林、一九九五年、第二章で述べました。

このようにわたくしは大学では最初法律学を学んだのですが、この頃までにわたくしは、後年、哲学を専門とすることになったさいの前提となる、多くの文化的・思想的なテーマにかなり広い関心をよせていました。前述した反戦・平和と主権在民以外の問題として、次の三点をここであげさせてください。

一つは、中学生の頃、岩波文庫でプラトンの『プロタゴラス』や『ソクラテスの弁明』を読んだときのあの新鮮な感動をいまでも思いだします。これは、学校からの帰途、電車で角筈(新宿)まで寄り道をして、紀ノ国屋書店——そこは今のようデラックスではないが、当時としてはかなりモダンな文化的なレベルの書店のよう思えました、——その店でスピノザの『エチカ』とともにこの二冊を買ったのでした。高校の入試のとき口頭試問で、「尊敬する人物はだれか」ときかれて、わたくしは、プラトンの『弁明』に出るソクラテス、と答えました。当時一般的な風潮としては、楠木正成というのが多くの人々の声だったようです。そんなわたくしにとって、やがて、昭和十六年のことでしたか、それとも……忘れてしまいましたが、皇紀二六〇〇年の祝典など、まったくの作り事に思えました。

もう一つは、中学二年生のとき神田の三省堂に行き、数学のコーナーから竹内端三の『整数論』をえらんで買ったことです。序の冒頭に「ガウス曰く数学は科学中の女王にして整数論は数学中の女王なり」と書かれているのに感動しました。整数論は美しい。学校で教わった二つの正の整数(すなわち自然数)の最大公約数を求める算法が、「ユークリッドの算法」とよばれ、学校数学とはまるでちがって、素数にかんする諸定理のなかでこの算法が展開されているのが驚きでしたし、「素数ハ無限ニ多ク存在ス」という定理が帰謬法(reductio ad absurdum)と矛盾律によってみごとくに簡潔に証明されているのは、さらにそれ以上の驚きでした。また、「エラトステネスの篩」——すなわち自然数の無限の系列のなかからいわば篩にかけて素数を洩れなくとりだす手法——も面白い着想だと思いました。この書物では、相合の理論や循環小数の理論へと問題が

展開されていきました。さらに、ピュタゴラスの数とフェルマーの大定理の問題。これらは、中学生の頃のわたくしにとって、デデキントの実数論、カントールの集合論、アーベルと群論、位相幾何学などと親しむようになる前提となりました。

三つ目は、物理学で、十九世紀末から二十世紀にかけてのキュリー夫人によるラジウムの自然崩壊の発見、長岡シラザフォードによる原子模型の提示、要するに、原子構造論です。そして、リーマン幾何学の適用によるアインシュタインの一般相対性理論。ギリシア自然学と近代物理学とが基本的に異なることはいうまでもありませんが、人間の思惟における数学と物理学との結合によって自然の内奥、その美的構造に迫る未知の大問題への関心がひろがりました。

ともあれ、待ちに待った終戦の日が来しました。絶対主義的天皇制のもとでの侵略戦争の敗北、強暴な日本帝国主义の崩壊の日が来しました。戦後のひどい混乱、生活の極度な困難のなかでしたが、わたくしは、両親のおかげで東大文学部哲学科（旧制）に再入学し、古代ギリシア哲学を専攻のテーマとして選ぶことができました。一九四五年十月、日本共産党は公然たる活動を開始し、全国各地には労働組合が続々と創立され、民衆の力は日々にたかまりました。折りしも一九四七年二月一日を期し、国民の生活危機突破の要求をかかげる全国の労働者六〇〇万のゼネストが計画されました。東大の研究室の雑談で某助教授が「すべての人が右を向けば問題はすぐ解決する」と語ったとき、わたくしは反対して、「すべての人が左を向けば解決する」といったのを覚えています。このゼネストは、しかし、占領軍総司令部の最高指揮官マッカーサーによって弾圧されました。ラジオ放送で、伊井弥四郎共闘議長は、銃を突きつけられながら、「一步後退、二步前進」と労働者の団結をよびかけながら、声涙俱にくだる言葉で、ゼネスト中止の止むなきにいたった旨を告げました。一部の頑固な者をのぞく市民の圧倒的な支持をかちえていたのがこの闘争でした。

このように時代の激動するなかで、わたくしは、十五年戦争をふりかえって、日本共産党が天皇制のもとで治安維持法による苛酷な弾圧を受けながらも、侵略戦争反対、主権在民のために不屈にたたかったこと、この弾圧のあと、さきに述べたような諸教授の訴追（大学からの追放）の事件が続出し、とくに陸軍の横暴のもとで、国民の思想・言論の自由が根こそぎ奪われたことなど、その歴史的な過程について前々から感じていたことを、はじめて理論的に理解しました。わたくしの戦時中の戦争反対、思想・言論の自由の願いは、そのなお閉じられた空想的な限界を踏みこえてすすまなければなりませんでした。もはや、ロランやヘッセやトルストイにとどまることはできませんでした。

他方、学問の分野では、湯川秀樹の中間子論、坂田昌一の二中間子論、朝永振一郎の超多時間論、くりこみ理論などのめざましい理論的成果が伝えられ、また、武谷三男の提唱したいわゆる「三段階論」、坂田昌一の著書『物理学の方法』などは、物理学とその発展にたいする自然弁証法の疑う余地のない正しさをさし示しているように思われました。これは、今日にまでいたるわたくしの哲学と哲学史研究をつらぬいている問題の一つとなりました。東大の出陣教授は、わたくしに、アリストテレスとガリレオ・ガリレイの問題を卒業論文のテーマとすることを示唆され、カトリックの畏友押田成人君（化学出身でかれも哲学科に再入学していました）とこのテーマに取り組みましたが、問題が多岐にわたっていて難しく成らず、わたくしはテーマを変えて「西洋古代中世における永遠と時間の問題」と題する膨大な論文を書いて、自分の思惟のなかの観念論的な契機をおすすめることを通して、反対に、その根本的な清算をめざしました。

一九五四年三月一日、ピキニ環礁水爆実験による第五福竜丸の漁夫二十三名の罹災があり、九月には久保山氏の悲しい逝去となりました。日本国中に原水爆禁止の運動が湧きあがり、当時北大に勤務していたわたくしは札幌の雑誌に「水爆戦準備者とその協力者に反対して」と題する、短くはない論文を発表しました。これは

わたくしが反核・平和の運動に積極的具体的に参加する出発点となりました。やがて創立された北海道平和委員会のメンバーとなり、五十年代末から六十年にかけての歴史的な安保闘争のさいには、札幌はもちろん、各地の炭鉱や、根釧平野やオホーツク海沿岸の諸地域にいたる全道の大衆的な運動に参加しました。これは、アメリカへの従属から日本の独立をかちとるたたかいであり、核兵器廃絶・軍事同盟拒否を求めるたたかいでありました。カントの恒久平和論の意義もあらためて知りました。エラスムス、ジャン・ジャック・ルソーの平和論の意義も――。

II ギリシア・ローマ期の哲学から

ここから本論にはいることといたします。しかし、今日は、時間の都合上、メタフィジカル（形而上学的）な問題にはたちいらぬことといたします。

1 奴隷制のうえに立つ民主主義

古代ギリシア・ローマ期の哲学を全体として制約し規定している社会的性格として、奴隷制の上に立つ民主主義ポリスということを考えておく必要があると思います。すなわち、古典古代的奴隷制と思想の問題です。

(1) 古代ギリシア哲学と奴隷制

古代ギリシア（およびローマ）の哲学は奴隷制とは関係がないといふかなり根強い説があります。じっさい多くの学者は、そのような関係はないものとして、哲学史の著作を書き、講義をしているようです。あたかも哲学思想がそれを生みだす社会構成的な性格と無関係でおられるかのようです。一般に、そのような視点の誤りであることは、二十世紀の日本をみてもわかると思います。いわゆる「大東亜戦争」の最中という哲学者

がもてはやされていたか。また今日、この混迷した世相のなかでどういう哲学者が、『朝日』や『毎日』などの新聞や、岩波書店の哲学・思想関係の講座物などにしきりに登場してくるか。思想と社会・時代との関係は不可分だと思います(もちろん、わたくしは思想と社会の性格とを短絡して捉えようというわけではありません)。たとえば、M・I・フィンレイ編『西洋古代の奴隷制』(古代奴隷制研究会訳、東京大学出版会、一九七〇年所収)のR・シュレーファー「ホメロスからアリストテレスまでのギリシア人の奴隷制理論」は両者の関連を無視することのできないことを明らかに示しています。

ヘラクレイトスの有名な断片の一つに、御存知のように、「戦いは万物の父、万物の王である。それは或るものを神々、他のものを人間として示し、或るものを奴隷となし、他のものを自由人となした」というのがあります。この断片では、戦い、すなわち矛盾によって神々と人間、自由人と奴隷との間の支配関係が生じたことが指摘されています。両関係のなかには、H・フレンケルもいうように、或る比例的関係をみることもできるかもしれませんが。そのさい人間イコール自由人(奴隷を排除)とするヘラス的な見方もできるだろうと思います。

* もっとも、人間が自由人と奴隷とに分かれ、この関係を、神と人間との関係に等しいとみることもできるかもしれませんが(すなわち、記号化していえば、 $A \cdot B \parallel C \cdot D$ において、 $B \parallel C$ 、もしくは $B \parallel C + D$)。

(2) 神殿の建造と奴隷

古代ギリシア諸ポリスやその植民諸都市に今日旅行すれば、各地に多くの神殿がルインとして残っているのを見ることができます。アテナイのアクロポリスはもちろん、デルポイ、オリュンピア、スニオン、小アジアのベルガモン、エペソス等々。それらの建造は奴隷労働なしには到底不可能でした。神韻繚渺たる山中でのおびただしい奴隷たちの労働の結晶がデルポイのあの神殿の跡なのであり、その神託をアテナイ市民たちは信

じ尊重していたのでした。また、アテナイのアクロポリスに建つパルテノン建築があればこそ、ペリクレス時代のペイディアスらによるギリシア彫刻のみごとな果実がうまれたのでした。

(3) 哲学思想と環境の諸条件

哲学思想が社会的な影響を免れることができないことについて序手にいえば、アテナイ生粋きっすいの名門の生まれであるプラトンと、イオニア文化の伝統をもち、マケドニアの支配下にあった都市スタゲイラの生まれで、王の侍医を勤める父をもつアリストテレスとの、生涯と思想の相異を思えば、哲学者とその生活および学問とが環境といかに密接に関係しているかが、理解しうるだろうと思います。

どんな場合にせよ、哲学思想が抽象的な空間で形成されるはずはないのであって、社会との関係をたちきつてひとり深遠な哲学思想を構想しようとする者は、どんなに自分は回避してはいないと強弁しようとも、そうすることによってかえって事実上この重要な問題を回避していることになると思われるのです。

2 哲学の起源をめぐって

(1) イオニア地方での哲学の誕生

それでは、いつどこに西洋哲学の起源を求めめるかの問題にはいりません。従来、アリストテレス『形而上学』第一巻第三章の叙述に依拠して、前六世紀、ミレトス派のタレスが哲学の創始者とみなされてきました。アリストテレスもその箇所少しあつて、別の視点をとればヘシオドスを始祖とみなしうるとの見方も示しています。とはいえ、やはりアリストテレスが、自然の物質性をタレスがはじめて問うたことの意味の重要性に着目したことは、卓見であったといえるだろうと思うのです。もっとも、もしインド哲学を叙述するにあたって、ヴェーダ聖典、さらにリグ・ヴェーダにまで辿りうるとすれば、西洋哲学の起源も、ヘシオドスからホメロス、

さらにより大きな地域に共通のものとして、メソポタミアの神話、ギルガメシュ叙事詩などにまで遡らなければならぬかもしれない。スケールの大きなこのような思想史も叙述されるだろうと思います。

しかし、人間の思惟・精神が飛躍的に発展するためには、古い神話の形式を脱却することが必要でした。そして、神話的形式がトータルに俎上にのせられるためには、自然の領域全体から神話の衣を脱ぎすてるという世界観の根本的な転換が果たされねばならないでしょう。タレスが、自然としての自然の物質性を問うたことの意味はここにあると考へなければならぬだろうと思います。

(2) 哲学誕生の条件

では、イオニア地方ミレトスにこのような哲学が誕生した社会的条件は何であったか。小アジアでは、つとにヒッタイト人やミタンニ人の地方では、青銅器から鉄器への文明の移行があり、鉄器製造の技術が大いにすすんでいましたが、やがてエーゲ海に面するその西岸のイオニア地方にギリシア人の植民がおこなわれ、前八、七世紀頃には、そのミレトスなどの諸ポリスは、港市として、東地中海から内陸へと通ずる交通と商品流通の要衝として、しだいに隆盛に向かいました。これらの諸ポリスの東方には文明度の高いリュディア王国が成立しており、その地で世界でこの頃はじめて鑄造貨幣が作られたのでした。この鑄造貨幣を媒介として、ミレトスなどの諸都市での商品流通は飛躍的に発展しました。今日エペソスの博物館を訪れると、前六世紀のものとされる発掘された鑄貨が陳列されており、当時のこの港市での殷賑な交易のさまが偲べれます。

『資本論』でマルクスが明らかにしたように、貨幣は、もとはといえば、さまざまな生産物が相互にそのつど商品として物々交換される長い過程のなかで、ある特殊な生産物Ⅱ商品がやがて一般的等価という役割を担うものとして特殊な位置を占め、ついに他の諸商品にたいして貨幣という相対的に独立な形態をとるようになったものとして理解されます。毎日の生活のなかで営まれる無数の商品流通の場での貨幣の成立が、いかに

人間の抽象的な思惟の発展の成果を示すものであったか、またいかにそのいっそうの発展を促すものであったかは、想像に難くないと思います。しかも、やがて鑄造貨幣の成立したことの大きな意義に注目しなければならぬでしょう。なぜなら、ここに一定の純度と一定の分量をもち一定の価格を表示した貨幣が成立したからです。それ以前には、貨幣となる金属商品の重さを計りしかもその純度をそのつど分析しなければ、一般の等価の機能を十分に果たすことはできなかったのです。われわれは幼時から日常的に鑄貨の恩恵に与っており、その恩恵をほとんど忘れてしまっています。しかし、その成立には人間の知恵の高度な発展の跡が刻まれているといえるのです。往時、農業の発展を基盤としつつ商品交換がめざましく高度に発展したことが、鑄造貨幣成立の基盤であり、また鑄造貨幣による商品交換のこのいっそうの発展が、神話の形態を脱ぎすてて自然を自然として捉え、その物質的根源への問いを成立させる客観的条件であるとみることができらうと思うのです。

その頃、マイアンドロス川の川口にのぞむ海港ミレトス、その背後にはかつてはおそらく翠滴る樹々が連なり人々の生活に潤おいを与え、また、前方の岸辺を、広々としたエーゲの海、東地中海の穏やかな碧い波頭が洗っていました。大自然のなかでの水の豊かな流転は、日々の民衆の生活の大きな循環の諸相をうるおっていました。

(3) 一般的な「対等交換」を果たす金

前六、五世紀の交、ミレトスの北方、同じくエーゲ海にのぞむ海港エベソスで活動したヘラクレイトスは、かれが万物の根源とみる火と万物との関係を次のような言葉で表現しています。「万物は火の、火は万物の、対等交換 (antanoibe) である。ちょうど商品が金の、金が商品のそれであるように。」火はここで、他の万物にたいして、それ自身としては万物の一種でありながら、しかもそれだけは抜きんでて（すなわちここでは

根源にあるものとして、それら万物とは異なる一定の独自の役割——一般的な対等交換の担い手としての機能——を果たしていることが、着目されています。火は、かれにおいて、万物の相互転化における相互的な比率ポロプスを維持する基準を与えるものとして理解されています。この断片のうちには、当時のイオニア地方における商品流通と貨幣経済とのかなりの発展状況が反映されている、ということができましょう。

3 万物の根源の探究と宇宙論

(1) 万物の根源の探究

イオニアの哲学者たちが万物の根源アルケの探究、いかえれば自然界の根本物質は何か、の問題を提起したことについてはさきに触れました。万物の根源とは、アリストテレスがいうように、——若干、直訳調になります——が、関係代名詞を連想させながら訳しますと——「すべての存在がそのように存在するのは、それからであり、それらすべてはそれから生成し来り、その終わりにはまたそれにまで消滅し行くところのそれ」、すなわちそういう万物の生成・発展・消滅の、最初であり最後であるところの、根本物質を意味しています。

ところで、これまで哲学史について書かれた多くの論著、あるいは講義によると、この根本物質の探究の今日にいたるまでの意義がほとんど述べられていないようです。あたかも、ミレトス派からレウキッポス、デモクリトスの原子論でその探究の道は終わってしまった、そこからソクラテスが出て哲学の中心問題がすっかり転換してしまったかのようです（そして、タレスからデモクリトスまでは「ソクラテス以前の自然学者たち」として、あたかも過去のものであるかのように一括されてしまう）。もちろん、そのあと、おりおりに、エピクロスやルクレティウス、近世のガッサンディの名があげられるにしても、です。たしかに、古代原子論と近代における科学的方法による原子、分子等々の研究とは同日に論ずることはまったくできませんが、古代原子

論の考え方は、ガリレイ、ニュートン、さらに Boyle らの科学者たちによって受け入れられ、新しい化学の父とされるドルトンもこのような思想的系譜を継承していることは、ドルトン自身の著作によっても知ることができます。古代原子論の示した方法的意義は小さくないのです。

タレスが道を拓いた根本物質の問いは、ルクレティウスを介して、ガリレイ、ニュートン、ドルトンを経て、マリイ・キュリーによる原子崩壊、プランクの量子説、アインシュタインの光量子説、シュレーディンガー、ハイゼンベルクによる量子力学の形成、そして今日における素粒子論の展開へとすすみます。ところで、素粒子論の展開のさいに、坂田昌一の自然の階層性の思想——自然の階層は限りなくすすむ（所与の認識段階を究極のものともみなしてはいけない）という弁証法思想——が決定的に大きな方法的役割を果たしたことはいうまでもありません。かつて遠い昔に、根本物質は何かの問いに託した自然哲学者たちの夢は、いま、トップ・クォークの実験的な発見を経て、サブ・クォークはありや否や、あるとすれば何か、の探究に向かっているということができるといえるでしょう。

(2) ケノン（空虚）の問題

ギリシア語のケノンは空虚と訳されますが、ラテン語は *vacuum* であり、今日の日本語では真空です。デモクリトスによれば、周知のように、真に実在するものは原子とケノンであり、無数の原子が限りなく広大なケノン中を運動する。その運動によって衝突・反跳がおこり、その結果、無数に近いきわめて多数の原子が運動しながら濃密に集合することがあれば、そこに一つの世界が^{コスモス}できる（もちろん、そのなかには無数の小さな合成体——個物——もできます）。イギリスの B・ファリントンも「かれ（デモクリトス）の原子論は、タレスに始まる宇宙の自然的本性についての合理的思惟の運動の、古代での絶頂に達したものである」と書いています。

原子を有とすれば、非有であるケノンの存在を主張したのは、古代ギリシアにおいてかれらがはじめてですが、アリストテレスはその存在を否定しました。すなわち、その非有を主張しました。しかし、アリストテレスの学園リュケイオンの第三代目の学頭ストラトンは、個々の合成体の内部に微小なケノンの存在を認めました。この考えは、ヘロンらを通して、近世にいたります。そして、真空の問題は、ルネサンス期のガリレイ、トリチェリ(その有名な水銀柱の実験)を経て、パスカルに及びます。

もう一つの問題は、ファラデーを先駆とするマックスウェルによる電磁場の理論、ディラックによる陽電子の予言などを経て、真空の物質性の問題が提起され、他方アインシュタインの重力場の理論にはじまり、今日、四つ、すなわち、重力場、強い力の場、電磁場、弱い力の場の統一理論の構築が重要な課題となってきました。

(3) 根本物質の探究と宇宙論との結合

ディールス編の初期ギリシア哲学者たちの断片集によれば、イオニアの初期の自然学者たちが、その根本物質の研究と結びついて、どのようにして根本物質から無数の世界が生成してくるかという宇宙形成論をば、とにかく当時の思考の限りを尽くして展開しようと努力していたことが理解されます(今日からみて、それらを幼稚な思考として一蹴するひともいるかもしれませんが、かれらには他にどのような思考が可能でしたでしょうか)。そして、根本物質の研究と宇宙論、宇宙進化論とのこの結合は、古代の原子論者にいたるまでひきつがれます(ヘレニズム期初頭のエピクロスの見解としては、出隆・岩崎『エピクロス——後説と手紙——』一一一—一五ページを参照してください)。

今日、素粒子論が宇宙論と結びついて相互に展開していることについては、専門家による多くの指摘があるので述べません。両者が緊密に結びつくはずであるのは、結局、両者の対象自身が同一に帰するためです。

(4) 世界は無数か、それとも一つか

簡単に要約していえば、エレア派のパルメニデスは、全存在(宇宙)はただ一つで有限で球形をなすといい、この点ではアリストテレスも同様で、宇宙(≡世界)の外側にはケノンもないとする。これにたいし、デモクリトス・エピクロスは全存在(宇宙)は無限でそのなかに無数の世界があるとす。この見解は、ローマ期のルクレティウスを経て、ジョルダーノ・ブルーノにひきつがれます。自然観の今日にまで及ぶ長い歴史において、無限宇宙論(ここには無数の世界がある)と有限宇宙論(ここでは宇宙とは世界のこと、ただ一つである)との対立を想起することができます。わたくしはかつてブルーノに触れて、「今日でいえば、無限の宇宙と無数の銀河系を表象しようではないか」と書いたことがあります。なお、ブルーノの宇宙論を準備するものとしてクザーヌスの思想があります。

(5) 太陽中心説

ピタゴラス派のピラオスは、地球などの惑星や太陽が或る(想定上の)中心火の周囲を回転するという説をたてましたが、ヘレニズム期のアリストアルコスは、三角法を用いて不十分な結果ながら太陽と月との大きさおよび相対距離を測り、太陽が月よりはるかに大きいことを知り、そこから太陽中心の地動説を考えるにいたったといわれます。のちにコペニクスは、プタルコスの記載によってこのことを知り、ここから着想をえて地動説をうちたてたと伝えられます。宇宙ないし諸天体のモデルを観測データと結びつけて描き、チェックするという考え方は、以後、東洋にたいして西洋の宇宙論ないし天体論の優位を示すことになるといえると思います。

なお、ギリシアの数学についてついでにいえば、数学がとくに論証の学として展開され、公理的な数学がエウクレイデス(ユークリッド)によって当時のレベルにおいて集大成されたことの意義は大きい。アルキメ

デスの力学の定理も、公理から論証されるという形で示されているのですから。

4 生物の進化と人間

古代ギリシアにおいて生物進化の考えがもたれていたといえましょう。イオニア派のアナクシマン드로スです。生物は水分の多いところ、多分水中に生じ、のちに人間は魚によく似た生物から進化した、と考えていたようです。

前五世紀、若い頃イオニアの学統に親しみ、ペリクレス時代のアテナイにイオニア自然学を導入したアナクサゴラスも、生物進化の見地に立って、——アリストテレスの『動物部分論』によれば——「人間は、手をもつがゆえに、すべての動物のうちで最も思慮ぶかい」という卓見をわれわれに残しています。アリストテレスはしかしこの見解を批判し、逆に、人間は「動物のうちで最も思慮ぶかいがゆえに、手をもっている」という命題を対置しました。アナクサゴラスは、知られているように、宇宙的な意味をもつ理性（ラティオ）（つまり客観的な合法則性）の考えを提出した人であり、決して理性を低くみる人ではありませんが、かれの手についての見解は、まだ労働と技術を尊重していた時期のイオニアの知識人の啓蒙的な考えを受けつぐものであり、はるかのちに、猿から人間への進化の過程で二本の足の歩行による手の解放の意義を明らかにしたエンゲルスの思想を先駆しているといえましょう。これにたいし、前四世紀のアリストテレスになると、なるべく、神にあやかる純粋思惟の生活を送ることが人間にとっての最高の幸福なこととみられるようになるのです（これはかれの労働蔑視の側面と結びついていると思います）。

5 人類の生活と文明の発展

シケリアのディオドロス『歴史』第一巻は、世界の形成から生命の発生後、生物の進化を経て、やがて人類の社会生活と文化が発展する過程についての注目すべき記述を含んでいます。人間の生活と文明にかんする部分についていえば、この記述の資料となったものは、デモクリトスの著述かもしれず、そうでなくても、思想的にその近辺の失名の自然学者の記述を資料として書かれたものとみうるでしょう。B・ファリントンは次のようなコメントをしています。「アリストテレスは、人間は生まれつき（自然的に）ポリスの動物である、といったが、ここではそうではなくて、人間は、経験の漸次的進歩の過程によってポリスの動物に成るのである。」「また、人間は言葉の賜物を神から授かるのではなくて、ここでは、人間はその歴史的發展の過程において物をいう動物に成るのである。言葉の意味は人間の便宜によって定められたものである。それゆえ、言葉の意味を詮議することによって自然を理解しようなどという仕方——これが、やがてギリシア思想の特徴的な悪行となるのだが（いや、さらに現代においてさえ……筆者）、こういう仕方——をする代りに、この原著者は、社会の発展の歴史の研究によって言葉の意味を理解しようという側に立っている。人間は、その概念的な定義や本質において理性的な動物であるのではない。人間は、必要という指導者のきびしい訓練を経て、ことにその有能な手もっているがゆえに、理性的な動物に成ったのである。この無名の原著者は、人間文化の歴史における技術の重要な役割を認めていた。」

この思想は、ヘレニズム期のエピクロスから、ローマのルクレティウス・カルスの哲学詩『物の自然について』第五巻、そしてわれわれへと着実に受けつがれてゆきます。——プラトンにはこういう着眼が基本的に欠けているといわねばならない、と思います。

6 ソフィストたちの人間・社会思想

ソフィストは、長らく詭弁を事とする者のように解され、詭弁家と訳されてきました。これは、周知のように、多分にプラトンの著作のなかでの記述に起因しています。しかし、かれらのポジティブな側面を、残された断片などをみながらもっと考えなおす必要があると思います。ここでは二、三の点を述べておくにとどめようと思います。

(1) 人間は万物の尺度

「人間は万物の尺度」というプロタゴラスの命題にたいし、プラトンは『テアイテトス』と『法律(ノモイ)』できびしく反論しています。従来、『テアイテトス』におけるプラトンの批判によりながら、この命題は、長いこと、極端な現象主義、主観主義、さらには懷疑主義として解釈されてきました。ところで、『ノモイ』においては、プラトンはこの命題にたいし「神こそが万物の尺度である」というかれ自身の基本命題を対置しています。したがって、この問題は、現世界を、つまり自然・社会・人間を、神の立場から捉えるか、それとも神を否定して人間の立場から捉えるか、という二者択一の問題に関わっています。プラトンはイオニア的系譜にたつ思想家たちの所説をきびしく拒み、「魂は物体よりも先にあったもの(第一次的なもの)であり、物体は第二次的で、より後のものである。したがって、魂が支配し、物体は支配されるのが、理にかなっている」といいます。そして、魂こそが一切の運動・変化の源泉・根拠でなければならぬとします。しかし、そのような見解をとらないイオニア的自然学者たちの学説を、嫌悪をもっておとしめ、神こそが宇宙全体を合目的に配慮しているという観点から出発して、自然界の万物の運動・変化をいろいろ説明しようとするプラトンの所論のうちに、今日われわれが自然認識として学びうるものを何かひとつでもみいだしうるでしょうか。

(2) 平等

ソフィストたちにみられる平等思想は貴重なものであると思います。

(i) まず、人間の本来的な平等については、当時の社会体制の基盤をなしていた奴隷制についての疑問から、アンティポンは、自由人と奴隷との本性的な峻別に反対し、バルバロイ（異民族のもの）もギリシア人も、「すべてのものは自然によって同じように生まれついている」といいます。——同様に、「現人神^{あらひとがみ}」なんて宮城のなかであろうとどこであろうと、地上にいるはずがありません。すべての人は平等に生まれ、平等に働き、平等に生きねばなりません。

(ii) また、所有と教育との平等についていえば、カルケドンのパレアスは、市民たちの紛争はすべて財産をめぐるおこるとし、財産の規制の考えを導入しました。土地所有は平等であるべきだといえます。のみならず、かれは、ポリスには、所有とともに教育の平等も存在しなければならぬと考えました。——これはぜひぶん重要な認識で、事柄の根幹をついた主張でしょう。

(3) ミレトスの民主的ソフィスト、ヒッポダモスは最善の国制について考えた最初の人といわれます。かれは人口一万人のポリスを計画し、民衆^{デモス}を、手工業者、農夫、戦士に分けました。ここには王族も、貴族身分も出てこないのです。そういうものは不必要なのですから（現在でも不必要なものがあちこちにのさばっているのではないでしょうか）。役人はみな民衆によって選挙されなくてはならぬ。しかもその仕事は、公共のこと、外国人のこと、孤児のこの世話であるとなりました。——これは、たいへん重要な指摘であると思います。もちろん、人類の未来への展望として、われわれは、戦士、すなわち軍人などのなくなることをたえずめざさねばなりません。

7 プラトン

プラトンについては、今日はわたくしは否定的な点を多く指摘しましたが、かれにおける最もポジティブな側面はその理想主義に現れているとわたくしは考えます。ローマの「ラファエロの間」に掲げられている「アテナイの学堂」では、その奥手からアテナイの二人の学の巨匠、プラトンとアリストテレスが歩み出てきます。プラトンは高き理想を語り、右手の指で高き彼方を示しつつ、アリストテレスは、いや、現実をこそ重視すべきだと、右手の掌を下にして前方に差し出していきます。わたくしはここではこのことのみを語って次にすすみたいのですが……。しかしなお、もう一つ、ルネサンス期に、トマス・モアが、プラトン『国家』篇の理想主義を積極的に受けとめ、著作『ユートピア』で、「戦争で得られる名誉ほど不名誉なものはない」と喝破していることを想起したいのです。わたくしは大学の講義のなかで、学生に、この一年間で話したこと他のことをほとんど忘れても、いつかもしどこかで戦争がおこりそうになったとき、この言葉を思い出してくれたら、それでわたくしは満足する、としばしば語っています。もちろん、プラトンはこういう言葉を残していませんが、思想はこのように歴史を超えて新鮮な思想を飛躍的に生みだすのです。——アメリカのブッシュは、さきの湾岸戦争で勝利したとき、二十万もの——いや、そのたしかな数は今後も分からないでしょうが——罪なきイラクの女性たち、子供たちがハイテク兵器で死に、あるいは死にきれずに苦しんでいるのに、全米放送で、誇らかに勝利を告げ、アメリカの栄光をたたえるのです。イラクのフセインがどうであれ、そのこととは別に、覇権主義者はその犯した罪業の深さを知るべきであると思います。

8 ヘレニズム・ローマ期の哲学

(1) 広汎な領域での哲学思想の興隆

この時期、ヘレニズム、そしてローマの版図に共和政、ついで帝政が施されました。ギリシア本土、イタリア半島はもちろん、トラキア、黒海沿岸、カッパドキア、シユリア、イェルサレム、ティグリス・エウフラテス流域、ベルシア、エジプトのナイル河流域、あるいはカルタゴ、また西方スペインのコルドウバなどから、いくたの俊秀が、陸路を渉り、また海路をはるばると渡って、アレクサンドレイア、ベルガモン、アテナイ、ローマ、あるいは、カッパドキアのカイサレイア、さらにアンティオケイア等々、各地の往時の名立たる学園につどい、相互に交流しあい、そこから哲学思想が華々しく進展したのです。

(2) ギリシア風の哲学と教父哲学との交渉、対決

ここで一つの哲学史上の問題を提起したいと思います。すなわち、紀元後のローマの数世紀を、哲学についていえば、ギリシア風の哲学と新たに成立したキリスト教哲学(教父哲学)との同時代的な交渉・摂取・対決においてダイナミカルに捉えるという視点の重要性です。これは当然のことのように思えるかもしれませんが、従来、この視点が十分に提起されているとはいえないように思うのです。たとえば、ここに最近郵送されてきた一枚のダイレクト・メールの散らしがあります。わたくしはこの書物や編著者をとくに批判するつもりは少しもありません。これはたんに一例なのです。しかし、これは、古代から中世にわたる西洋哲学史の書物ですが、「古代」では、新プラトン主義がプロティノス以後プロクロスあたり(いわゆる古代哲学の終焉)まで辿られ、次の「中世」では、目次によれば、アウグスティヌスから始まる(これは教父哲学全体を代表させているのでしよう)。しかし、アウグスティヌスはじつは中世ではなく古代の真っ只中の人物です。コンスタンティヌス帝によるミラノの勅令(三二二年)でキリスト教にたいする信仰の自由が認められることになりましたが、そのあと、新プラトン主義を奉ずるユリアヌス帝によってローマの神々の信仰の復活がおこなわれたのは三六一年のことです。アウグスティヌス八歳の時です。かれの生涯は、ゲルマン諸民族が都市ローマを陥れアフリカ

に攻め込んでくるまさにその激動の時期です。それゆえ、もちろんキリスト教の哲学だけを最初からストレートに歴史的に叙述することをめざすならば別として、いやしくも時代を古代、中世と分かつたらば、中世の思想は、やはり、カール大帝によるカロリング朝の成立、いわゆるカロリング・ルネサンスの時期から始めねばならないでしょう。従来の、キリスト教中心というか、少くもキリスト教を切り離して述べる多くの古代中世哲学史は基本的な視点を誤っていると思います。グノーシスにせよ、教父哲学にせよ、古代ローマ期の思想として、ギリシア・ローマの哲学的宗教的な相互交渉のなかで捉えなければならない、と考えます。

(3) その他の若干の点

時間がわずかしかないので、四点を急いでとりあげます。ただし、そのなかで最後の二点については少し詳しく述べさせていただきます。

(i) ユダヤ哲学者ピロン

前三五年頃アレクサンドレイアに生まれ、そこで学問的研鑽を重ねたユダヤの哲学者ピロン。かれの宗教哲学は、ギリシア哲学とユダヤ神学——これはすでにギリシア哲学的な要素を媒介しながら構成されていますが——このユダヤ哲学との融合とということができます。かれの哲学において、のちに三世紀のプロティノスによって展開された新プラトン主義の壮大な哲学の脊骨となるハイネマンのいわゆる「アレクサンドレイアの世界図式」が、はじめて鮮明なかたちで現れてきます。この世界図式では、一方の頂点に神的な真実をおき、他方の極に、まったく受動的な質料をすえ、その中間に諸存在の階層を考えています。前者(絶頂)から後者(他方の極)への下降、また後者から前者への上昇、これは別の言葉でいえば発出と還帰であって、ここでは、問題は魂の救済にかかわって根本的にたてられています。ともあれこの観念論的な世界の描像は、その後思想内容はさまざまに異なりながらも、のちの九世紀、カロリング王朝のスコトゥス・エリウゲナや十五世紀のニ

コラウス・クザーヌス、近くはフィヒテ、ヘーゲルの体系へと発展的に連なるものをもっています。

(ii) キケロとスパルタクス

前一世紀ローマの代表的な知識人で文化人、そして哲学者であったキケロに、まず指を折らねばなるまいと思います。かの剣闘士奴隸スパルタクスが蜂起したのは前七三年、キケロがまだ弱冠三十四歳で、ローマ支配階級のホープとして登場してきた時分のことです。イタリア本土を、いやシシリー島までも巻きこむこの死活的な「戦争」(bellum)には四万以上の奴隸が加わったといわれます。キケロをはじめ当時の人々——支配階級の者さえも——が、この事件をどのように認識していたかについて、土井正興氏は次のように書いています。「蜂起をやっとの思いで終らせた前七〇年の時点におけるローマの支配階級にとっては、この三年間のすさまじい戦いの実感から、この戦争を奴隸階級との闘いとして扱っていたのであり、いわば蜂起の指導者であるスパルタクスと奴隸大衆とは混然一体のものとして、戦争の相手としての奴隸としてみられていたのであり、スパルタクスと奴隸大衆は未分化のものであったし、ローマの支配階級は奴隸大衆全体を、ここまでかれらを苦しめた相手として、ある種の畏敬の念すら抱いていたと考えられる」と。土井氏はさらに、蜂起終了後百年を経過した頃でも、畏敬の念が支配階級のあいだに残っていたことを示すものとして、蜂起に参加した奴隸について、プリニウス『博物誌』第三巻からの一文を引用しています。「何と、われわれの逃亡した奴隸が、心情的の偉大さにおいて、われわれを顔色なからしめることか」と、そこには書かれています。

(iii) マルクス・アウレリウスと剣闘士奴隸

マルクス・アウレリウス・アントニヌスは、いわゆるローマの五賢帝のひとりで、ストア派の著名な哲人です。北方からはゲルマン民族の度重なる侵攻があり、シユリア方面の紛争があり、あちこちに戦争が絶えることなく、おまけに、悪疫、飢饉、河川の氾濫など、じつに多事多難でした。かれとしては、正義・博愛の精神

で統治したいと願っていましたが、容易なことではありませんでした。かれの著作『自省録』は、その原題を直訳すれば『自分自身に』であることからわかるように、戦陣や、多忙な政務のあいまに、静かに自分自身に語りかけながら綴ったもので、H・テヌは「生を享けたもののなかで最も高貴な魂」をそこにみえています。いま、二つの言葉を引用しましょう。「自分の内を見よ。内にこそ善の泉があり、この泉は、おまえがたえず掘り上げさえすれば、たえず湧き出るであろう。」「良い道を歩み、良い道にそって考え行動することができさえすれば、おまえはつねに穏やかな生を送ることができる。」

わたくしはもちろんこの哲人を尊敬しています。しかし、いま、心は苦しいが、次のことを述べたい。これは、アウレリウスを批判するためではなく、むしろ深く自戒の思いをこめてなのです。

アウレリウスの統治する現実のローマ。そこは、悲惨に呻くローマです。高貴な魂であることを疑えない皇帝アウレリウスにして、しかもまお己れを見失うほどの、現実の狂うほどの厳しさがそこにあります。

帝政期には、共和政期の状態をひきつぎ剣闘士奴隷の試合はいっそう残酷になり、公的、組織的におこなわれており、市民はそれに熱狂し、支配者はすすんでその場を提供しました。ローマ市のコロセウム——それは、現在、ローマ発祥の地、モンテ・パラティーノの近くその東北東にあって、観光客を誘い、夜も彩光を浴びて闇のなかにくっきりと浮びあがるあの遺跡コロッセオです——、このコロセウムは、五賢帝のときになっても、流れる血潮、苦しんで死んでゆく剣闘士たちに熱狂する数万の観客の興奮の坩堝となるのでした。「帝政初期のアウグストゥス時代には一年間に六六日であったが、二世紀のマルクス・アウレリウスのころには、一三五日以上にのぼるというありさまであった」と、土井正興氏は書いています。

コロセウムの建造が、市民の要望をうけて拍車をかけておこなわれたことはたしかです。そしてコロセウムはローマの象徴となりました。ストア派の思想自体は、本質的には、こうした制度をつくったり、あるいは実

際に興業を推進したりすることは、まったく両立しえないはずでしょう。しかし、その思想は、弱点をもち、ひよわい。そしてあまりにも高踏的であり、剣闘士にさせられ絶望と屈辱のどん底に投げこまれる奴隷たちのことに関わろうとはしないのです。こうして、『自省録』にも、剣闘士奴隷の悲惨な存在にたいする反省がみられないのです。むしろ、アウレリウスはこれを制度的に承認し、しかもかれらにたいする侮蔑ともいえる言葉をさえししているのです。これは、残念なことです。剣闘士には、人間同士の死闘をする場合と、野獣相手に死闘する場合がありますが、後者について、マルクス・アウレリウスは、ある知人に寄せた言葉のなかで次のようにいっています。「じっさい、君がいままでそのままであり、そういう生活のなかで引き裂かれ汚されているのは、度外れて無感覚で生に執着する人間のすることであり、半ば喰われている野獣剣闘士のような人間と同類である。そういう輩ときたら、傷だらけになり血にまみれながらも、それでも明日まで生かしておいてほしいと懇願する。そして、そういう状態で、けっきょくまた同じ爪や歯の下に投げこまれるわけである」。

わたくしはアウレリウスが人間として高貴な魂の持ち主であることを否定しません。しかし、帝国統治の最高位にある皇帝にはやはりまったくくみえないものがある。くりかえしていいいますが、わたくしは批判のためにではなく、自戒のためにこのことを述べるのです。われわれはつねに、自分に見えているものの底に、見えていないものを見ようとすることを忘れてはならないと思うのです。

もう一つ述べさせてください。このようなことがあってもなお、古代哲学は奴隷制と無関係なのでしょうか。奴隷制をぬきにして、それとはまったく無関係に、古代哲学を講ずることができるのでしょうか。そんなことでは、現代もなお世界の各地に存続する古典的奴隷制も近代的奴隷制も見えてこないのではないのでしょうか。核兵器やハイテク兵器の脅威のもとに、平和のうちに生きるという人間的な権利が蹂躙されている今日の世

界の民衆の胸のうちの怒りも、また日米軍事同盟のもと米日の非情な支配者によって生活と労働の基本的権利も根底から強奪されているわが沖繩島民の深い苦悩も、なにも見えてこないのではないのでしょうか。どうして古代哲学の研究者は、古代哲学は奴隷制と関係がないなどといっていられるのでしょうか。

* 国際労働機関 (ILO) の『世界労働報告一九九三年』を参照してください。

(iv) アウグスティヌスの平和思想

さいごに、四世紀半ば頃から五世紀にかけて活動した、最大の教父哲学者といわれるアウグスティヌスの平和思想について述べましょう。わたくしは、アウグスティヌスについて、まずプロテスタントの三谷隆正先生(著作で感銘を受け、ついでカトリックの岩下壮一先生から多くのことを学びました。一九四三年(昭和十八年)の秋、大学を出て東京日比谷公園近くの内幸町の辺りに就職したわたくしは、職場から自宅に帰ってから、毎夜のように、東大の図書館に通って(自宅から近かったからです)、アウグスティヌスの『告白』を読み耽っていたことを思い出します。わたくしは今回の著作でこの哲人にぜひぶん思いを入れて書くことができました。

アウグスティヌスは北アフリカ、カルタゴに近い田舎町タガステに生まれ、カルタゴで学び、やがてローマに出ますが、マニ教からしだいに脱却し、ついにキリスト教に回心し、四世紀の末頃、アフリカに戻ってヒッポの司教となりました。当時はゲルマン民族の大移動の只中で、四一〇年には、アラリックの率いる西ゴート族の軍がローマ市を陥落させて劫掠し、いまにもシシリー島からアフリカへと攻めこもうとする勢でした。「永遠の都」ローマはこれで実質的に滅亡したといわれます。その後、西ローマ帝国は四七六年に滅亡し、五世紀の末にはその地はゲルマン民族の支配に帰してしまうという時代でした。五世紀の始めにイペリヤ半島に侵入し、さらにジブラルタルを越えてアフリカに攻めいったヴァンダル族は、四二九年にその北岸に王国を

たてましたが、その翌年、四三〇年には、アウグスティヌスの教会のあるヒッポを包囲します。その戦乱の緊迫するなかでアウグスティヌスはこのヒッポで最後の息を引きとるのです。かれの畢生ひっせいの大著『神の国』は、四一三年から四二六年までの年月をかけて執筆されました。まさに激動する大転換の時、西ヨーロッパ、地中海地域の各地で戦乱、殺戮がおこなわれ、民家の苦難のついで絶えることのなかったのが、かれの生を享けた時期なものでした。

* しかし、アウグスティヌスといえども、このようにローマ帝国の領域の各地に侵攻してくる強大な軍力をもつゲルマン諸民族が、やがて結局は、世界史の新たな担い手として登場することになることまでは、おそらく洞察しえなかつたでしょう。かれはまだ古代の思想家なのです。

ローマ帝国の版図内にあつてこのような生涯を送つたアウグスティヌスにとって、戦争と平和の問題は、深い思いを寄せずにはすまない事柄でありました。

遠い昔からかれの時代まで、とくにローマの版図の拡大のたびに「どれほど多くの大きな戦闘がおこなわれ、どれほど多くの人間が殺戮され、どれほど多くの人間の血が流された」ことか。目を蔽いたくなるほどのその悲惨、その残酷の極を知るアウグスティヌスが『神の国』で、人間の歴史における戦争と平和の問題について心血を注いで書き綴っているのは当然であるといえましょう。最も根本的には、キリスト者であるかれにとつて、当然、「神の国の最高善が、永遠で完全な平和である。」そしてこれを「永遠の生における平和」あるいは「平和における永遠の生」ともいっています。とはいえ、現実の問題と格闘するアウグスティヌスは、この最高善を掲げるだけではすまず、現実世界の戦争と平和の問題について多くのことを考え、批判し、不当にひきおこされる戦争に同意せず、地上の平和を願っています。かれはいいいます、「平和はひじょうに大いなる善であつて、現世において、これ以上に熱望して求められるものはない。これ以上に善いものはない。」

と。

強大な国の（とくにローマ帝国のおこなってきた、支配欲にもとづく、領土の拡張、他国の占領、諸民族の征服、そして殺戮・掠奪・凌辱等々、これらの暴力にたいするかれの激しい批判に注目したいのです。「正義がなくなる」とき、王国は大きな盗賊団以外の何であろうか」とかれは思うのです。ある海賊が捕えられたとき、アレクサンドロスが「海を荒らすのはどういふつもりなのか」と問うたところ、海賊はすこしも憶するところなく次のように答えました。「陛下が全世界を荒らすのと同じです。ただわたくしは小さい舟でやるので盗賊とよばれ、陛下は大艦隊でなさるので、皇帝とよばれるだけの話です」と答えたのです。アウグスティヌスは、この答えはまったく適切で真実をうがっているとし、つづけて次のように書いています。「隣国に戦争をしかけ、それからまた他の国に侵入し、自分にはなんの害にもならない他の諸民族を、たんなる支配欲によってうちひしぎ、屈服させるということは、大きな盗賊行為以外のなんと呼ばれるべきであろうか」と。——今日までつづく強大な諸国による世界支配（地球上の土地の分割・再分割による支配）、とくに強力な核兵器をバックとする超大国の覇権主義についても同様のことがいえると思います。それゆえまた、今世紀における近隣諸民族にたいする日本の侵略の暴挙を深く反省し、現行平和憲法における平和条項撤廃の企てにたいしても断乎反対しなければならぬと思います。

アウグスティヌスはまたこう書いています、「領土の拡大をよろこぶことが善良な人間にふさわしいことであるか、ひとは考えてみるがよい。」「強大な力をもつ国は、征服した諸民族に軛くわを課するだけではなく、平和のきずなとして自分の言葉をさへも押しつけようと骨を折った」と。——天皇制のもとでの覇権主義、侵略主義が、朝鮮や台湾や満州の人々に、皇室の宗教と日本の言葉を押しつけ、日本の「神々」である天照大神や現人神あらひとがみを遥拝させ、日の丸を掲げ日本語で話すことを強要したことを、想起しなければならぬと思います。

アウグスティヌスは、四一〇年にローマを攻略した西ゴート族による、女性信者にたいする暴虐や、尼僧にたいする凌辱にかんじて生ずる問題について、激しい怒りをこめて綴っています。アウグスティヌスはこういっています、「精神の神聖性がなくならなにかぎり、たとえ身辺の自由がきかなくても身体の神聖性はなくならないということを経なければならぬ」と。わたくしはアウグスティヌスとはちがってキリスト教の信仰をもたないけれども、もしかれと同時代にあつて同じ事件に際会したら、かれとともに断固としてわたくしも同じことを主張したいと思います。——そして、かつて天皇の軍隊がおびただしい数の異民族の女性たちを慰安婦として、あるいは民家に乱入して手当り次第に、凌辱したことを、われわれは、日本国民として、深い反省と謝罪をこめて、想起しなければならぬと思います。

長時間御静聴をありがとうございました。